
グリーンパーク

ペムペル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリーンパーク

【Nコード】

N8925S

【作者名】

ペムペル

【あらすじ】

消えた娘を探して、公園の中で出会ったモノ。終わらない公園の歴史。

緑公園。

陳腐な名前に寄り添うのは、最近塗りなおされた光沢のある遊具、仰々しい学名の書かれた札がぶら下げられた見分けのつかない木々、木々は重い腰をあげた春の陽光にさらされ、つやつやと生命力に濡れている。こうした光景が緑公園という名前の由来だとするなら、私の勤務先に設置された喫煙室も、緑公園という名前のほうがふさわしいかもしれない。社長の嗜好か部長の嗜好か、とにかくお偉いさんが持ち込んできた観葉植物を所狭しと並べ、喫煙室は灰色と緑の奇妙な和音にあふれている。

勤務先ではなく、静かな住宅街の一角に置かれたほうの緑公園で起きたある事件のせいで、休日だというのに遊ぶ子供たちの姿はなく、さびしげに砂が舞っている。街を三十分も歩けば、モノ好きで新聞社のインタビューを受けられるかもしれないが、いま用もなく出歩くのは、自分を特別だと思い込んでいる樂觀主義者が、暇をもてあました野次馬か、あるいは私のような被害者家族か、それくらいのものだ。

先週、中学一年生になる私の娘が失踪した。娘は、幼稚園児の弟、つまり私のもう一人の子を連れて、この緑公園にいたという。別に珍しいことではない。年が離れてはいるが兄弟の仲は良く、むしろそのために娘の「姉」としての意識が強まっているのか、弟の面倒を見るのは嫌いでないらしい。

件の日、日が沈んでから、息子のジュンが目をはらして帰ってきた。腕にはスコップがあり、ズボンが泥に汚れていたので、公園にいたのは確からしい。

「カオルに置いてかれた」

そうジュンはいった。しかしカオルは家に帰っていなかった。こ

のときは不審な行動に首をかしげたただけだったが、深夜になつてからあわてて警察に連絡したというわけだ。家出の可能性を疑うより先に、緑公園でカオルの下着が見つかった。警察はいよいよ本格的な捜査に乗り出した。

しかし私たち家族にとつてのカオルという存在は、その時点で死んでも同然であつた。下着が見つかったという状況からどう推測しても、想像はある一点に収束して凝固する。カオルが戻ってきたときになんと声をかければいいのか判らないのだ。同じカオルは戻つてこない。そして万が一カオルが戻ってきたなら、それから是一緒に、一寸先すら見えないような暗い道を歩いて行かねばならないという責任、絶望、怒り。リセットできるものは何一つないのだ。妻は無口になり、ロボットのようにパターンにそつて毎日を消化している。妻の脳内の竜巻は私には見当もつかないものだろう。ジュンには幼ながらに事態の深刻さを本能的に感じ取っているのか、基本的にはいつもと変わらないように見えるが、カオルの名を口に出さないようになった。母が無口になったことにも触れない。しかし毎日布団の中で泣いているのを私は知っている。

私は同情のまなざしの鋭利さを知つた。他人から同情されない限り涙は出ない。どれほど悲観にくれたとしても、自分の部屋に独りでいる限り涙は出ない。しかし家の外に出て、近所中から同情の目に突き刺されたたん、ばらばらになつて涙があふれる。他人の同情をスイッチにして、自分の不幸が質量を得るのだ。同情は人間の純粋な感情のひとつだが、しかし罪である。

ねじまがつた針金を戻そうとねじまげればねじまがる。

私が今日、緑公園を訪れたのは、事件が起きて以来初めてのことだった。妻には煙草を買つてくるといった。警官の姿は見えないが、たぶんどこかで見張っているのだろう。犯罪なんて実際に起きてみると、ドラマや小説に比べてずっと地味だ。そしてずっと灰色だ。

失踪という曖昧な事件は大衆の興味をそめることはないし、突き詰めれば無価値に限りなく等しい。何も事件が起きないということ以上は無価値かもしれないのだ。

気がつくと手が震えていたが、どういった意味なのかちよつと判らない。しかし確かに震えている。私の後ろに二つの目が浮かんでいるような感覚に撫でられたが、たぶん幻想ではない。警官は私が被害者の父親だとちゃんと理解してくれているかどうか。

ふと思い立って、カオリの下着が落ちていたという場所を見ていることにした。公衆便所の裏の茂みになっている場所らしい。公衆便所はまるでその建物そのものに周りから小便をかけられてきたかのように、外壁の黒ずみが甚だしかった。

不思議な感覚だった。確かにそこへ向かおうとしているのに、足がまったく動かないのだ。呼吸が浅くなっているのか、心拍が増してくる。右にN極があつて左にS極がある。いけない、あまり拳動不審でいると手錠を持った正義の味方がわたしのところに。
うお。

と、変な声を出してしりもちをついてしまった。はたから見たら相当奇妙奇天烈なふるまいだ。めまいがしたのだ。心臓がドキドキと落ち着く気配がない。

ひとまず一服つけよう、落ち着こうと思って、本当に煙草を買いに行くことにした。

最近の自販機というのはやけに神経質な性格になったようで、タルトだかポストだか、電子的なカードがないと私のような白髪交じりにも煙草を売ってくれないらしい。私がそこを離れて少しして振り返ると高校生らしき制服を着た少年がこともなげに購入していたので、ひよつとするとそれを持ってないのは恥ずべきことなのかもしれないが、とにかくコンビニまで足を伸ばしたのだが、燃えていた。あまり考えている時間もなかったので遠くのコンビニまでえっちらおっちら、緑公園に戻ってきたのは西が赤く染まる夕方であつ

た。

親指と人差し指で煙草をつまみ、じつくりと眺めてみた。十年以上つれそつていながら、こうして間近に見るのは初めてであった。たかだか五百円弱で売られた束のうちの一本であるのに、目を凝らすと、外皮に刻まれた一本一本のしわがやけに高級そうで、人生経験の堆積した老人の肌のような安心感をかもしだしていた。

火をともして老人と口づけする。安心感が煙に溶けて肺を満たすと、肩のこわばりが和らいだ。それまでは肩がこわばっていたことすら気づかなかったのだ。力強い友を得たような心持で、公衆トイレの裏、まで歩いて行った。

不思議な違和感があった。説明のつかない違和感だ。靈感でもあるのかもしれないと頭でばやきながら、なぜか設置されている花壇の隅に腰を下ろした。緑公園のゆえんである傲慢に生い茂った木々と公衆トイレに日光を遮られているせいで、生きている花はひとつもなかった。浮浪者のような雑草がのさばっている。笑えてくる。緑と緑の競争社会というか、弱肉強食というか。

そこで違和感の正体を突き止めた。考えてみればここはもともと、光も入らず人目にもつかず、鬱々としていて公園から孤立している空間であり、小学生が卑猥な本を読んだりとか、眼光のいかれた主婦が炊飯器を捨てていくとか、最も暗黒的な場所であったはずだ。だからこそ今回のような事件もこの場所で起こったのだと考えていた。しかしいまはどうだろう。オレンジの輪が地面に降りている。西の陽光に間違いはないか。つまり、と思つて上を見上げると、木々の葉がからみあつて構成していた天井がきれいに丸く刈り取られている。そこから日光が入り込んでいるのだ。

閃光と蝶。

ふと気が付いて目を開けた、と思ったがやはり目は閉じたままだった。なぜ？ という疑問はやがて解決した。夜に包まれていたのだ。暗闇に目が慣れるうち、前に誰か立っていることが判った。

「大丈夫ですか？」

ええなんとか、と応えようとしてがばつと飛び起きた。なぜ私が地面に伸びていたのか、いつ夜になつたのか、そんなことはどうでもよい。その声は紛れもなくカオルのものであった。

「おまえ……」

と、絶句した。カオルは上にパーカーを着ているが、下半身を守るものはなにもなかった。闇の中ながら真ん中に刻まれた線が確認できる。あわてて目をそらした。

「おちついて聞いてください。私はこの肉体の持ち主ではありませんせん」

とカオルがいった。しばらくの沈黙のうち、

「わたしは別の惑星からここに着陸した者です。いまはこの肉体を借りてあなたに話しかけています。この肉体は無傷で返すことができます。怖くはない」

まず考えたのはカオルをどこの病院に入れるかということだった。近所の視線に敏感な妻のことだから精神病院と名のつく所は避けようとするだろう。いやまず妻を入院させるべきか？

「やはりそこまでの柔軟性はありませんか。いやこれは申し訳ない。これを見ていただきましょう」

カオルは両手をくいつと、何かを払い取るようなしぐさをした。と、何もなかった空間にバナナのような形の銀色の物体が登場した。「宇宙船というやつですか？ この肉体のボキブラリーでいうところの」

いよいよ私は、この好き勝手な幻惑と対峙しなければならなくなつたらしい。腹をくくつた。これが過度な心労が生み出したユニークなパラノイアであれ、実際の未知との遭遇であれ、目の前のカオルを家に帰らせることがとりあえずの義務であると感じたのだ。

「あんたはどの星から来たんだ？ カオルは無事に帰らせてくれるんだろうな」

「質問はゆっくりお願いします。まず私の故郷ですが、これはまあ教えたところで何がどう変わるといってもありませんし、別にいいでしょう。この肉体は無事です。本来の私はとても小さいのです。この肉体の聴覚器官から脳に寄生し、一時的に麻痺させてもらっているだけです」

「そうか。そうか。うん、非常に要領のいい受け答えだ。じゃあそろそろ核心といこうか。なぜ、私の娘を？ なぜ、娘の下着を？ あんたのその待遇のおかげでね、私の妻は頭が宇宙人みたいになっちまったんだよ」

カオルは無表情のままため息をついた。寄生してるやつがそうするように身体を促したのだろうか。芝居がかっていやがる。

「そのシンプルな要求に応えるには長い時間を必要とするかもしれない。私の故郷は、膨大な歴史をこの惑星に費やしてきました。正確にはこの惑星だけではなく、私の故郷が使命を受けたその瞬間から、生命体の存在するありとあらゆる惑星、それこそ歴史においては数えきるだけで一生が終るような、途方もない数の惑星を私たち種族は放浪し続けたのです。それが種族に課せられた使命であるから。なぜという質問に対するひとつの答えがそれです。しかしこれだけでは納得すまい。迷惑をかけたお詫びに、説明しましょう。私たちの使命とは、新しく生れ出た文明たちに血を通わせることなのです。すなわち、この」

と、カオルは腕を挙げた。

「領域のことです。ここには、この惑星のふるまいを決定づける、ありとあるスイッチが設置させられています」

「……公園？」

「そう。あなたがたはここを公園と名付けたこの場所こそ、スイッチを埋め込むのに最適なのです。あなたがたはスイッチをいじくりまわすことに魅力を感じてくれる。もちろんそうと計算してのこと

ですが。ちょっと見てみましょうか」

カオルは下半身を露出したまま、草葉の陰から電灯に照らされた公園の中心部へと歩き出した。私はふらふらとついてゆく私を俯瞰しているような気分であった。

「まずこのスイッチです」

カオルはブランコを立って漕ぎ始めた。うつすらと生え始めた陰毛が妖しく揺れる。

「いま、この惑星の生物がひとつ死にました……いま、あたらしい生物が生まれました……いま、またひとつ死にました」

ぴよんと飛んで着地した。

「お判りですか。このスイッチが後ろに引つ張られるとひとつ死に、前に引つ張られるとひとつ生まれる。これがこの惑星の仕組みです。ちなみに、もうひとつのスイッチは作用が逆になっています」

操縦士を失ったブランコはけだるげに浮遊している。カオルはとても単純なことを説明しているかのようだ。2たすに2が4。いや5だったか？

「信用していただけないのなら、ちょっとした遊びをしましょう」

カオルは手招きで私をジャングルジムまで誘導していった。虫が鳴いていた。頭は冴えていた。妻もああみえてこんな感覚で過ごしているのかも、とよぎった。

「これはとても複雑なもので、私も完全に把握しているわけではありませんが。この骨組みそれぞれに回路が仕込んであります。この回路に触れる順番によって、地球の息遣いかわるのです」

カオルは無表情のまま、ひとつ、またひとつ、とでたらめにジャングルジムにつかまっていた。でたらめにしか見えなかった。「これで最後です」といつてから、軽い地震が起きた。体を支えようとしてジャングルジムにつかまった。

「あ。このタイミングでその回路を触ると、休火山が活動を始めると思います」

私は手を放した。

「もうご理解いただけましたね。もちろんこの領域だけでなく、ス
イツチはいろいろなところに設置されています。だからあなたがた
は完全なる惑星の細胞、いや、電子のひとつひとつといいまし
ようか……とにかく、そういう次第なんです」

カオルはまたトイレの裏へ歩いて行つた。誰かに見られたといふ
ことはなさそうだ。

「まだ答えて欲しいことはある。なぜうちの娘が必要だったんだ？」
「宇宙船の燃料が、足りなくて……意外とよくあることなんですよ。
この惑星で一番それに近いものを、娘さんからいただいたんです」

「なにを……」

「経血です」

「けい」

髪が逆立つのを感じたが、カオルは問題のデリケートさを理解し
ていないようだ。それとも、ほかの惑星ではもつとあつぴろげなも
のなのだろうか？

「もう用は済みました。この肉体に長居はしたくないんですよ、失
礼な話でしょうが。どうやらあなたはこの肉体の持ち主と関係があ
るらしい。預けましょう。脳は太陽が見えるころには回復しますよ。
くれぐれもお礼をいっておいてくださいね」

カオルは地べたに座り込んだ。

「ああ、お礼といえば、この肉体の脳ミソをちよこつと掃除してお
きましたよ。上等な知能を持つようになるでしょうな。それからあ
なたへのお礼として、記憶をそのまま保管させてあげましょう。聞
くところによると、人間というのは他人が知らないものを知ること
に優越性を見出らしいじゃないですか。安心なさい、人間にスイ
ツチのありかは見つかりっこありませんから」

それでは。

緑公園に夏が来るころ、ジュンの朝は早い。夏休み、新しく作られたアスレチックの場所取りで戦争となるからだ。必然的に、付き合って早起きするのは私になる。

あのアスレチックにはどんな仕掛けが施されているのだろうか？あの宇宙人は新しいスイッチを組み込むために地球に滞在していたのだろうか？ 狂乱的に遊びまわるジュンを見ながら、ぼんやり考えるのはそんなことばかりだ。暑い。

ふと、そばをカオルが歩いて行った。きっと塾に行くのだ。通わせたのは私だ。宇宙人の言葉を信じているから。

「いつてらっしゃい」

カオルはあいまいな顔を向けた。おっかなびっくりなまなざし。暑い。私が妻を見る眼もあんな感じなんだろうか？

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8925s/>

グリーンパーク

2011年5月1日14時10分発行